

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370747

研究課題名(和文) 東亜同文書院の中国語教育活動についての実証的研究

研究課題名(英文) Study on the features of educational system of the Chinese language of the Toa Dobun Shoin college

研究代表者

石田 卓生 (ISHIDA, Takuo)

愛知大学・愛知大学東亜同文書院大学記念センター・研究員

研究者番号：50727873

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦前上海にあった東亜同文書院の中国語教育について、そこで作成、使用された教材などの文献資料を整理しつつ、版本研究や統計処理も用いた分析を通して、その実態を明らかにした。研究の結果、東亜同文書院及び前身校日清貿易研究所使用教材を把握し、それらに基づいて、東亜同文書院の中国語教育について、(1)独自性、(2)継続性と発展性、(3)口語と文章語の二つのカテゴリーからなる総合的な中国語教育が実施されていたことを明らかにした。

さらに、欧米言語教育に偏っていた戦前の高等教育の中で、東亜同文書院は大学に昇格すると、日本で初めて中国語に主軸を置いた大学教育を行おうとしていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to make clear the actual situation of the Chinese language education by analyzing textbooks which were made at the Toa Dobun Shoin college established in Shanghai, 1901. As a result, three characteristics of the Chinese educational system of this college became clear. Originality: The Chinese textbooks were made only by this college staff had a plan to make a Chinese dictionary by themselves. Continuity and expandability: Teachers teaching the Chinese of this college were trained and grown in this college. The Chinese educational activities of this college were advanced by introducing the change of Chinese society. Spoken language and Written language: In this college, not only the education of the important written language, but also the spoken language was also added to strengthen the business work. Furthermore, this college pushed forward higher level of the Chinese education, especially after grow up to university. This is the first experience in Japan.

研究分野：人文学

キーワード：東亜同文書院 日清貿易研究所 華語萃編 外国語教育 中国語教育 北京語教育 アジア主義

1. 研究開始当初の背景

戦前から戦後の日本の高度経済成長期にかけて、中国語を必要とする場面で、多くの東亜同文書院生が活躍していたことはよく知られている。彼らの中国語は、もちろん東亜同文書院で学んだものであった。この学校は、独自の中国語教科書『華語萃編』や中国語教育雑誌『華語月刊』を刊行し、戦後愛知大学が『中日大辞典』として完成させることになる辞典編纂を行うなど、戦前における日本の代表的な中国語教育機関であった。しかし、従来の研究では作成、使用された教科書の整理や版本研究すら十分に行われておらず、その中国語教育活動の展開、変遷を把握できていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、戦前上海にあった日本の高等教育機関東亜同文書院の中国語教育について、教材等の文献資料の分析を通して、その実態を具体的に明らかにしようとするものである。具体的な目的は以下の三つである。

(1) 東亜同文書院が作成・使用した中国語教材を分析することによって、その中国語教育活動の変遷を把握する。

(2) 東亜同文書院の中国語教材の版本研究や分析、学外の教材との比較などから、その中国語教育の特徴や独自性を明らかにする。

(3) 東亜同文書院の中国語教育と戦後日本の中国語教育との関わりを検討する。

3. 研究の方法

東亜同文書院の中国語教育を教材などの文献資料を通して、その成立・発展、さらに変遷を具体的に明らかにするために、次の方法により研究を進める。

(1) 東亜同文書院内外の中国語教材にかかわる文献の電子化を進める。これによって、教材の全文検索を可能とし、読解という主観的な分析だけではなく、任意の表現や語彙、文字の使用回数などを数値として取り出すことによって客観的な文献間の比較を行う。

(2) 電子化した文献を統計処理も用いて分析し、それぞれの特徴や文献間の相関性あるいは相違を具体的に明らかにする。特にこれまで行われてこなかった『華語萃編』初集についての板本研究を詳細に行う。統計処理については、文献中の任意の文字列の出現頻度をとり、N-gram モデルによる数値化を基に、複数文献間の文字列の共起頻度を比較する N GSM (N-gram Based System for Multiple Document Comparison and Analysis) によって板本を分類する。また、2 文献間について相関分析を行うことによって、テキストの改訂前後を比較し、改訂の内容を明らかにする。さ

らに、複数文献間を類似性に基づいて分類するクラスター分析によって、文献間の関係を具体化し、これによって改訂による変化の大小を明らかにする。

(3) 東亜同文書院系の中国語教材に残る使用者の書き込みの分析から、その教育の実態を明らかにする。研究者が所属する愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、東亜同文書院卒業生や関係者から寄贈を受けた貴重な一次資料を多数所蔵しており、その中には学生が実際に用いたテキストやノートが含まれている。それらには、授業時や学習時の書き込みが残されており、学校側が想定した教育内容を反映するテキスト本文に対し、学生が実際に教室で受けた教育の実態を伝えるものとなっている。本研究では、そうした学生自筆の記録にも基づいて、東亜同文書院の中国語教育の実態を明らかにする。

(4) 中国、台湾、日本で東亜同文書院の中国語教育に関係する資料の調査を実施する。中国については、1945 年日本敗戦時に中華民国に接収された東亜同文書院旧蔵図書・資料が所蔵されている北京国家図書館での調査活動を行う。台湾については、台湾総督府図書館旧蔵図書・資料を所蔵する国立台湾図書館での調査活動を行う。国内では、東亜同文書院入学者が比較的多かったこともあって、関係者の寄贈資料を多く所蔵している九州地方の図書館を重点的に調査する。

4. 研究成果

(1) これまで東亜同文書院が使用した中国語教材については、『華語キ歩』(東亜同文会蔵版、東亜同文会 1901 年、1903-1908 年)と『華語萃編』が知られていたものの、その版本や二者以外のものについては明確にされてこなかった。このことについて、東亜同文書院だけではなく、その実質的な前身校である日清貿易研究所の中国語教材も含めて、次のものを明らかにした。

〔日清貿易研究所使用中国語教材 口語〕
・御幡雅文『華語キ歩』日清貿易商会蔵版下編(1891 年)
・桂林、御幡雅文著、香月梅外抄『日清貿易研究所教科書生意雑話』(1892 年序、1940 年)
・王秉元著、桂林、御幡雅文編、香月梅外抄『生意筋絡抄話』(1892 年)
・御幡雅文『滬語便商』(修文館、1892 年)
・御幡雅文『滬語便商意解』(修文館、時期不明)
・御幡雅文『滬語商賈問答』(1893 年未定稿)

〔日清貿易研究所使用中国語教材 文章語〕
・御幡雅文『文案啓蒙』(私家版、1889 年)
・曹仁鏡『欣賞齋尺牘』(1887 年)
・桂林口述、香月梅外記『申報意解』(1891 年)

〔東亜同文書院使用中国語教材 口語〕

- ・柏原文太郎『華語キ歩』全、東亜同文会蔵版(東亜同文会、1901年)
- ・吳啓太、鄭永邦『官話指南』(1881年?1882年?)
- ・金国璞『改訂官話指南』(文求堂、1903年)
- ・御幡雅文『華語キ歩』全、東亜同文会蔵版(文求堂、1903-1908年)
- ・金国璞、平岩道知『談論新編：北京官話』(1898年)
- ・金国璞、平岩道知『北京官話談論新編』(文求堂、1910年)
- ・高橋正二『北京官話音声譜』(東亜同文書院、1905年)
- ・御幡雅文『増補華語キ歩』東亜同文会蔵版(文求堂、1908年)
- ・朱蔭成序『北京官話教科書』巻1(東亜同文書院、1910年)
- ・『華語萃編』初集(東亜同文書院、1916-1920年、1925-1928年、1930-1935年、1936-1940年、1942年、1943年)
- ・『華語萃編』二集(東亜同文書院、1924年、1930年、1933年)
- ・『北京官話旅行用語』(東亜同文書院、1925年、1933年)
- ・『華語萃編』三集(東亜同文書院、1925年、1932年、1938年)
- ・『華語萃編』四集(東亜同文書院、1933年、1938年)

〔東亜同文書院使用中国語教材 文章語〕

- ・青木喬『支那時文類編』(東亜同文書院、1918年)
- ・青木喬『現代支那尺牘教科書』(出版不明、1920年使用)
- ・青木喬『改訂支那時文類編』(東亜同文書院、1924年)
- ・青木喬『現代支那尺牘教科書』(東亜同文書院、1924年)
- ・青木喬『支那時文類編』第1輯(東亜同文書院、1928年)
- ・清水董三『商業尺牘文例』(未見)
- ・清水董三『普通尺牘文例集』第1輯(未見)
- ・清水董三、福田勝蔵『増補普通尺牘文例集』第1輯(未見)
- ・福田勝蔵、齊鉄恨『普通尺牘文例集』第2輯(未見)
- ・福田勝蔵『商業尺牘教科書』(東亜同文書院支那研究部、1933年)
- ・福田勝蔵『商業応用文件集』(東亜同文書院支那研究部、1934年)
- ・福田勝蔵『普通尺牘文例集』(東亜同文書院支那研究部、1937年)

〔参考教材〕

- ・小路真平、茂木一郎『北京官話常言用例』(文求堂、1905年)
- ・東亜同文書院支那研究部華語研究会『華語月刊』第1-119号(1928-1943年)

- ・山田謙吉『詩学』(謄写版、1928年)
- ・鈴木扨郎『標準支那語教本初級編』(東亜同文書院支那研究部、1934年)
- ・熊野正平『支那語構造公式』(東亜同文書院支那研究部、1935年)
- ・鈴木扨郎『標準支那語教本高級編』(東亜同文書院支那研究部、1936年)
- ・東亜同文書院支那研究部華語研究会『支那語試験問題解説』(1938年)
- ・御幡雅文混纂『華語キ歩音集』(未見)
- ・東亜同文書院中国語副読本『玲瓏集』(未見)

(2) 東亜同文書院の中国語教育で用いられた、あるいはそれに関係した教材群の分析からは、独自性、継続的発展、口語と文章語という二つのカテゴリー、以上の三つの特徴を捉えた。

独自性：前身校日清貿易研究所の中国語教育は、教員御幡雅文が作成した教材によって行われていた。同所の後身たる東亜同文書院も初期においては、御幡の教材を用いつつ、『官話指南』や『談論新編』など学外作成教材を用いた。しかし、早くも1905年には専用教材『北京官話音声譜』が作成され、1910年には『華語キ歩』に代わる『北京官話教科書』が作られるなど教員による教材が用意されるようになる。辛亥革命後には『華語萃編』シリーズが学年別に刊行されるようになり、中国語教育に関する教材を校内で供給する体制を完成させた。また、教員は中国語研究教育雑誌『華語月刊』を発行し、その誌上で中国語についての音声、方言、文法、教育法など多方面にわたる研究成果を公表し、加えて華日辞典(中日辞典)の編纂活動も行われた。こうした活動を支えた東亜同文書院の日本人教員は、影山巍(北京支那語同学会卒業)を除けば、東亜同文書院卒業生・日清貿易研究所出身者で占められており、東京外語など国内の中国語教育機関と直接的な影響関係がない単独の状態での中国語教学が展開されていた。さらに、1939年に旧制専門学校から旧制大学に昇格すると、旧制大学における外国語教育が欧米言語に限られていた当時であって、日本の大学としては初めて中国語を外国語教育の主軸に据えた大学教育を推進しようとしていた。それは、実用的な会話教材であった『華語萃編』初集に魯迅などの白話文学作品を収録することによって、該書を中国文化についての教養面をも学びうる総合教材へと改訂したことにあらわれている。

継続的発展性：これには人的側面と教材の側面の二つがある。人的側面とは、東亜同文書院の日本人中国語教員が、前身校日清貿易研究所出身者並びに東亜同文書院卒業生で占められていたことを指す。この学校で学んだ者が、卒業後に母校の教員となるというサイクルが形成されることによって、この学校の教育活動に継続性を与えさせることになり、従来の教学経験をベースにした改良が行

われることによって持続的な発展が可能となっていた。教材の側面とは、学内で作成された教材が繰り返し改訂されていたことを指す。30年間ほど使用された『華語萃編』初集は計5回の改訂を受けていた。その変更は、「徳津風」を「電話」に置き換えるといった語彙面、ウェード式から注音字母への変更という発音面、会話文だけでなく白話文(平易な文章語)を収録するという読本的性格の追加、さらにガス灯から電灯への切りかえ、女性の髪型の移り変わりなど中国人の生活の変化といったことまでテキストに取り入れようとするものであった。同時期の中国語教材で、これほど頻繁に改訂されていたものはない。東亜同文書院では、授業や教員の中国語研究、中国語自体の変化などを教材の中に継続的に取り入れることによって中国語教育を発展させていたのである。

口語と文章語：これまで戦前の中国語教育については話し言葉すなわち口語のみが注目されてきた。実際、著名な宮島大八『官話急就篇』(善隣書院、1904年)同『急就篇』(善隣書院、1933年)にしても内容は会話例文集であり、東亜同文書院の『華語萃編』も同様である。しかし、実際には尺牘(通信文)や時文(当時の実用的な文章語)といった文章語教育も相当盛んであった。これまでも『中国語語文資料彙刊』(不二出版、1991-1995年)、『中国語教本類集成』(不二出版、1988-1990年)には多数の文章語教材が収録されており、存在自体は知られていたものの、それが中国語教育の中で具体的にどのような位置づけにあったのかということについては考察されてこなかった。東亜同文書院では口語教育と同じく文章語教育にも力が注がれており、上掲のように学内で多数の教材が作成されていた。その教授法は、当初は漢文の訓読と同様であり、純然な外国語教育とは言えないものであったが、次第に中国語で音読させるものへと変化していたことが明らかとなった。また、明治期にあつては毛筆による文書作成の練習が行われていたものが、大量の事務処理が行われるようになったビジネススタイルの変化に合わせて大正期にはペン書きへと転換している。ビジネススクールである東亜同文書院にとって、ビジネスに関わる文書を処理する中国語力は、話すことによるコミュニケーションと同様に重視されていたのである。

(3) 従来の中国語教育史において強調されてきたのは、戦前は日本の中国大陸進出、あるいは侵略のための実用的な話し言葉、口語についての教育が中心であり、それは哲学や文学といった文化面での教学に寄与した欧米言語教育に対して低いレベルのものであったということである。しかし、日清戦争前後の10年間、東京外国語学校が廃止されていたように、日本において中国語教育は等閑視されていた。対中国戦争を進めた陸軍にして

も同様である。語学に通じる語学将校は特殊かつ少数であったし、中国大陸での戦争の度に中国語の出来る民間人を動員するなど通訳不足を露呈していたことから明らかなように、中国進出や侵略のために中国語教育が行われていたというのは誤った捉え方である。また、中国語教育に比して文化的かつ高級といったイメージの欧米言語教育の由来は、もともとは殖産興業を目指し、日本語の出来ないお雇い外国人から西洋技術を学ぶという極めて実用的な目的であった。その後、欧米言語の実用面での需要は減少したが、入学試験に代表されるように、それは日本の教育システムの中に組み込まれた。その結果、日本の社会では欧米言語教育を受けなければ進学に始まる社会的成功者としてのキャリア形成が不可能になったのである。対して、中国語は技術導入と関わりがなかったために欧米言語のような役割を担うことはなかった。そうした状況の中で東亜同文書院は、最終的には当時の教育の最高レベルである旧制大学として中国語を軸に教育を構築しようとしたのであり、それは戦後も含めて日本の欧米言語主流の外国語教育において特異なものであった。また、東亜同文書院は、ビジネススクールとして実用的な中国語教育を行っていたが、それは従来言われてきたような口語偏重ではなく、文章語も重視したものであった。中国市場で中国人と対等のビジネス交渉を進めることを想定している以上、文書処理能力は必須だったのである。こうした本当の意味での日中両国の間に立つための実用的な教育は、口語と文学作品読解が中心の現在の中国語教育には見られないものであり、現代においても大いに示唆するものがあるといえる。

〔全文電子化した資料〕

- ・御幡雅文『華語キ歩』下編、日清貿易商会蔵版(1891年)
- ・柏原文太郎編『華語キ歩』全、東亜同文会蔵版(東亜同文会、1901年)
- ・御幡雅文『華語キ歩』全、東亜同文会蔵版(文求堂、1903年)
- ・『華語萃編』初集、全6種版本(東亜同文書院、1916-1920年、1925-1928年、1930-1935年、1936-1940年、1942年、1943年)
- ・高橋正二『在清見聞録』(手稿、1890-1893)
- ・高橋正二『日誌第二』(手稿、1891-1892)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

石田卓生、水野梅暁ならびに藤井静宣(草宣)と東亜同文書院：非正規学生から見る東亜同文書院の一側面、愛知大学東亜同文書院大学記念センター報(同文書院記念報) 査読無、vol. 25、2017、pp. 35-60、<https://aichi>

u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7947&item_no=1&page_id=13&block_id=17

石田卓生、日清貿易研究所・東亜同文書院の教育と卒業生の事例的研究：高橋正二（研究所卒）・坂本義孝（書院第1期）・大内隆雄（書院第25期）の卒業後の軌跡、愛知大学東亜同文書院大学記念センター報（同文書院記念報）査読無、vol. 25 別冊2、2017、pp. 12-29、https://aichiu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7804&item_no=1&page_id=13&block_id=17

石田卓生、日清貿易研究所の教育について：高橋正二手記を手がかりにして、現代中国、査読有、第90号、2016、pp. 51-64

石田卓生、戦前日本の中国語教育の変遷：東亜同文書院を事例として、愛知大学東亜同文書院大学記念センター報（同文書院記念報）査読無、vol. 25 別冊1、2016、pp. 37-41

石田卓生、東亜同文書院の中国語文章語教育について：愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵テキストを中心に、愛知大学東亜同文書院大学記念センター報（同文書院記念報）査読無、vol. 24、2016、119-142、https://aichiu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7802&item_no=1&page_id=13&block_id=17

石田卓生、中山優写真資料について、愛知大学東亜同文書院大学記念センター報（同文書院記念報）査読無、vol. 23、2015、pp. 123-147、https://aichiu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7807&item_no=1&page_id=13&block_id=17

〔学会発表〕(計5件)

石田卓生、日清貿易研究所・東亜同文書院の教育と卒業生の事例的研究、愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催・一般財団法人霞山会後援国際シンポジウム東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う、2017.1.21、愛知大学、愛知県豊橋市、http://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=124805

石田卓生、静宣（草宣）の学んだ東亜同文書院：中国語を中心に、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・東アジア仏教運動史研究会共催ワークショップ近代日中仏教交流史からみる東亜同文書院・愛知大学、2016.11.12、愛知大学、愛知県豊橋市、http://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id

=124490

石田卓生、戦前日本の中国語教育の変遷：東亜同文書院を事例として、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・同大国際問題研究所・中華人民共和国社会科学院近代史研究所共催国際ワークショップ近代中国社会と日中関係、2016.9.9、愛知大学、愛知県名古屋市、http://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=116319

石田卓生、東亜同文書院の文章語教育について、日本現代中国学会東海部会第6回研究集会、2016.2.20、愛知大学、愛知県名古屋市、http://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=103604

石田卓生、日清貿易研究所の教育について：高橋正二手記を手がかりに、日本現代中国学会第65回全国学術大会、2015.10.25、同志社大学、京都府、http://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=97714

〔図書〕(計1件)

黄英哲、石田卓生他、あるむ、戦前日本の中国語教育と東亜同文書院、歴史と記憶、愛知大学国際問題研究所叢書、2017 予定

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

愛知大学東亜同文書院大学記念センターホームページ <http://www.aichi-u.ac.jp/orc/>

石田卓生、愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵資料目録：東亜同文書院(大学)関係資料の部：2016年3月現在、愛知大学東亜同文書院大学記念センター、2017、<http://www.aichi-u.ac.jp/orc/info03/Com2000103.html>

石田卓生、愛知大学東亜同文書院大学記念
センター所蔵資料目録：愛知大学関係の部：
本間喜一コレクション、愛知大学東亜同文書
院大学記念センター、2017、[http://www.aichi-
u.ac.jp/orc/info03/Com2000104.html](http://www.aichi-u.ac.jp/orc/info03/Com2000104.html)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

石田 卓生 (ISHIDA Takuo)

愛知大学・愛知大学東亜同文書院大学記念
センター・研究員

研究者番号：50727873

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()